別府大学
NOV.21.1984
図書館

佐伯史談

第九十二号

「郷土史研究」誌
通算第百十四号

昭和四十九年一月廿六日

佐伯史談会

事務所 佐伯市大字船頭字龍護寺羽柴方

主張

佐伯史談会の課題

―今年はこのように考えている――

佐伯史談会副会長
幹事 羽柴 弘

昭和三十三年三月に発足した佐伯史談会は、この三月で満十六年になる。はじめ僅か十数人であった会員も、今では三百六十余人にふくれ、機関誌「佐伯史談」はこれで九十二号を数え、前身「郷土史研究」から数えると、実に百十四号ということになる。

一昨々年春編集者の交通事故、八月から「佐伯市史」編さん事務局入りで、機関誌も奇数月発行ということになり、年間六回づつ、正確に二年つづけたが、号を重ねることがいささか遅滞した。しかし六月になれば「市史」の仕事から解放されるので、また以前のように毎月発行というもとの姿にもどり、今年の十二月には第百号発行を達成したいと考えている。

佐伯史談会、この名前はもう私共には定着していて、地域社会も好評をもって迎えてくれているようである。しかし今にして思えば、史談会の名称は、郷土史一辺倒を目ざしているようで、実は必ずしも名が体をあらわしていない。一応郷土の歴史を研究することを立て前として来たものの、それに加えて地理的な追求や、民俗風習、郷土芸能、文化財、観光資源の探訪など、「史談」の枠の中に閉じこもることなく、広くいろいろな分野にわたって勉強して来た。

そうしてこれを総括的にいえば、皆上に「わが郷土の」、あるいは「佐伯地方の」という言葉をつけて考えた、身辺の有形・無形の物象についての追求であって、それはそれでよかったと思う。

しかし、史談会と称してはいるが、郷土史だけの研究ではないことを付け加えなくてはならない。

本号の内容

主張 佐伯史談会の課題（羽柴 弘）……一
随想 今年の課題（市野瀬 仁）……五
研究 佐伯方言雑話(一)（山内武夫）……七
研究 横川先生と佐伯(中)（山本 保）……一二
―「郷土の研究」に学ぶもの――
研究 佐伯城絵図解説(七)（小野英治）……一六
―三ノ丸 坂下門付近――
紹介 桃花塾長岩崎佐一先生 (四)……一八
―国木田独歩との出会い（羽柴 弘）
談話 龍王山に登る……二〇
―昭和四十九年、年頭初歩きの記―
新年度役員会・昨年度決算と本年度予算
研究集会案内・賛助寄付・その他

このことについて北九州方面では「八幡郷土会」・「中津郷土会」と呼んでいるし、お隣りの野津町では「野津町郷土探究会」と名乗っている。その気持はよくわかる。だから佐伯史談会は、ここでその実態に即して、名前を変えようというのではない。ただ気をつけたいのは、郷土史だけの勉強におわり、郷土の昔物語や、古い墓塔などの物識りになって、いい気になっていてはとんだことである。このことはたえず意識して、巾広く郷土を認識することにつとめて来た。

それでここでは、敢えて従来のままの「佐伯史談会」という名前でいくが、その活動内容としては、広くいろいろな分野にわたるとして、さてどんなことを追求していたらよいか、じっくりと考えて見よう。

さて私共が、今目指している研修の分野・対象の問題であるが、どこまでもわが郷土の、佐伯地方の、いろいろなことを学ぶのであることを念頭に、私なりの項目をかかげ、佐伯史談会の課題を考えて見たい。

第一に、誰もがいつでも、まっ先に挙げるものは、郷土の歴史である。上古史、古代史は史料がほとんどない。中世史になると僅かながら文献や、極めてまれではあるが古文書があり、江戸時代近世史となると、かなり豊富にその資料が、佐伯市・南海部郡全域に亘ってあるのが嬉しい。「史跡めぐり」などによって、過ぐる十数年の積上げは、すでにかなりの成果をあげているが、まだまだ新しい史料がいくらでも出て来そうである。

この歴史的なものも、古代史の分野では必然的に、考古学の領域にはいる。自然遺跡や長良貝塚、弥生町にある横穴古墳群、方々から出土している鏃（やじり）や石斧など、言はば佐伯地方の夜明け前の姿であるが、私どもの掘り下げはまだ極めて浅いとしなければならない。

次に地理学の領域になると思われるが、佐伯地方の自然環境を重視したい。大野郡と境をしている佩楯山を主峰としている山並み、ゆるやかに流れる番匠川の流れ、佐伯九十九浦と呼ばれている リアス式海岸のすばらしい景観、それに地勢だけでなく、気候や産業や交通や、その外いろいろあろう。そしてこれにつながる地学（地質学・鉱物学・岩石学など）的な方面もおろそかにならない。秩父古世層がどれであるのか、中世層の構造帯がどう走っているのか。石灰岩の脈の走り方で鍾乳洞や石灰洞穴の発達がわかるのであるが、時には洞穴学の初歩的な知識がいるのではあるまいか。

また、阿蘇凝灰岩の分布に恵まれていることを思うと、磨崖塔や、石仏・石塔の多いことがうなずけるし、建築や土工にこれを昔から活用されていることも、容易に理解出来るわけである。

海抜七五四メートルの佩楯山の頂上近くに、夥しい貝の化石を含む地層のあること、字目町藤河内は花崗岩が浸食されている渓谷であることに思い至れば、私共はどうしても地球の生成、地殻の変遷などについても、ある程度の知識がほしくなる。この方面の手引きをして下さる、高校の先生の参加協力が是非ほしいと思う。

このようにあげかかると果てしがないので、以下思いあたるままに項目を追うて見よう。

まず郷土の文化財をとりあげると、種類も多く範囲も広い。前あげたものも包含されるし、そうでないものもある。はじめの頃は佐伯にはいいものはないと考えていたが、なかなかどうして、むしろ佐伯地方独特のものがたくさんある。例えば郷土芸能とよばれる神楽や盆踊り、

風流・盆踊・手束踊や歌げんか、農耕や漁猟につながる労働歌謡など、ユニークなものが多い。

郷土の人々が、貧しくつましく暮らしたその生活の中から、創意工夫して産み出した民芸品・生活民具、どうかすると私ども軽く見過したり、全く気がつかないものもあるようである。この方面は、まだ殆んど手をつけていないと言えよう。

佐伯地方の言葉についても同様である。今回からはじまっている山内氏の「佐伯方言雑話」は、うとんじられていた佐伯言葉を、改めて見直す好資料と言えよう。この外にも佐伯独得のことわざや地口、訛りやイントネーション（抑揚とでも言うか）単語のアクセントなど、むずかしく言えば、言語学の領域まではいらなくてはならない。

生物学に属する方面にもいろいろある。県文化財に指定されている城山のオオイタサンショウウオ、絶滅種乳洞に生息しているコウモリや虫、各地の野生猿、傾山に棲んでいるカモシカなどは、すでによく知られているが、この外に珍らしい動物があってもよいはず。植物についても同じことが言える。社寺の境内にあるナギはもう珍らしくも思わない。米水津村にあるビロウもビヤクシンも、また海岸部にはどこにもあるアコウもハマユウも同様である。深山や幽谷をさぐれば、佐伯地方だけ、そこだけにある珍らしい植物群落があるのではあるまいか。

上堅田の城八幡、弥生町の八坂神社の両社叢にあるハナガガシについて真柴茂芳氏について学んだが、老樹や名木、植物学上珍らしいものが、新しく私共の手で発見されてもよいと思う。筆者はまだカマエカズラも野生ギリも見ていない。それほど見聞が浅いのである。

郷土の絵画や文芸についても一言したい。佐伯にもよそに劣らず、庶民に親しまれた画家や歌人があって、わよい方よい今も尚私どもの心を捉える絵や文字碑に接することがある。神社の天井絵とか掲額とか、中には何時誰がかいたのか三十六歌仙の額があがっている。佐伯市南部合せると十社近くあるのではあるまいか。献詠の和歌や俳句の大きな額の掲げられている所もある。

社寺の建築にしても、昨年来二三の同志と注意して見ている。社寺建築について、どなたかくわしい方に聞きたいものである。

鳥居・燈籠・梵鐘・釣鐘・鰐口、気をつけて一々調べて、きめこまかな研究をしなくては、なにが、どこのものが貴重であるか、わかっていることが少ない。

郷土の人物、人材についても調べなくてはならない。佐伯地方からも、すぐれた学者や政治家や教育家が多数出ている。特に明治以後の人で、幕末期の日本文化に大きく寄与した人が何人もいる。私共が今つかんで居る人物志というものは、まだまだ杜撰（ずさん）で、ほんのうわつらをなでた程度でしかない。特に最近頭角をあらわし、日本では一流の人があるようである。

今、下から盛り上るように、会員の中からの声で、「古文書を学ぼう」ということが、ほうはいと湧き起っている。これはよいことで、そして大事なことである。佐伯人歴史を解明する最良の資料は、活字になっていなくて、毛筆で書かれた古文書という形で残されてある。独特のくずし字で流麗に書かれてあるが、それがなかなか読めない。

江戸時代、毛利藩政の記録が今も尚、市内にある毛利家の倉庫の中に、莫大な量が残されている。「毛利家文

書」や「家老日記」の類で、この解読研究は大変なことである。また佐伯には極めて少ないと思われていた地方文書（じかたもんじょ）が、旧庄屋などの旧家から、続々と出ていて、藩政時代の在（農山村）・浦（海岸部）の庶民の生活が、実に手にとるようにわかる。それが古文書の読解が出来ることには望めない。

そこで今年は会としての研修科目の一つに、古文書読解の集会を持つことにしたい。一度は大分から講師を招こう、何度か資料を持ち寄ったり、古文書のコピーをたくさん作ったりして、お互いでの演習会もやろう。会員の方々の奮起を望む次第である。

ここで私共は、古い昔のことのみ追っていて、現代の目まぐるしく変転している姿、つまり現代史と取り組むことが必要であるとしなくてはなるまい。

まず明治維新以来四十五年の明治時代、明治は遠くなりにけり」で、特に明治生まれの私など、幼少の頃からのいろいろな思い出を、残すべきものは記録して残さねばならない。日本の国勢の発展は、佐伯地方でもいろいろな面で飛躍的な進展をしている。しかしそれが地方史的な記録があまりなされていない。

大正時代もそうであるし、昭和に入ってもその前半は、遠くなって模糊の彼方に忘れられようとしている。

終戦後の世相の移り変りのはげしさも、私共はわが郷土、佐伯地方に一応視野を限って、変転する実態をつかんでおきたい。日本経済の復興と目ざましい成長は、必然的に私共の生活全域にわたって変化を来していて、私のような老人には、尺度を合わしたり、ついて行くのに一生は人命である。

そうだ。私共は現代を知らなさすぎるのではあるまいか。具体的に例をあげると、船大工の仕事は昔はよく見ていたのでそれはかなりくわしく知っている。しかし造船服所や坂野浦の造船所など、横目には度々見て通るが、ついぞ一度もじっくりと見学したことがない。

興人・二平合板・セメント工場、内陸部でも仲谷紡・大和冷機・川澄化学・前田布帛など農山村地帯から多数の労務者が働いているが、そんな工場でどんなものが生産されているか、その労務事情がどうであるか、その生産が地場産業にどんな波及効果を与えているか、殆んど知らない。

歴史は「故キヲ温ネテ新シキヲ知ル」ととされている。今年は努力して機会をつくり、このような工場だけに限らず、いろいろな公共施設なども含めて、社会見学を重ねたいと考えている。

昨年十一月、私共は佐伯文化会館で一般の人達を相手に「サイクリングによる史跡や景勝めぐり」のことを提唱した。自動車によるレクリエーションは、費用や交通事故や石油問題で、考えさせられている。その点自転車は手軽で、健康的で、そして谷間の小道にまで行き届くし、若い人達に歓迎されるであろう。「サイクリング・コース二十八選」を設定していて、それは十数年来私共の充分知りつくしているところである。土曜日の午後手軽に楽しめるようなのも八コース位ど選定している。四季折々、方面を考えて一般に呼びかけたいと思う。案外手近かなところに訪う人の心を捕える史跡や、すぐれた景勝地があり、これを一般市民に紹介提供することが出来、意味ふかいものがあると思う。

御開帳の日をねらって寺院の御本尊秘仏も拝観したい。神社の祭典には、道遠くとも出かけて行き、神楽や社頭、

りも見よう。千束楽など、スライドやハミリに撮り、録音をくわえて、まとまったものを作りたく思う。宇目町小野市の鷹鳥屋神社の神幸祭は秋十一月、すでに今年の計画の中に入れてある。

直川村の源六原（あるいは元祿原か）などに、古土器や石器の破片を拾う会も持ちたい。今が適期である。また個人の所蔵になる書画や刀剣、陶器などを拝見し、お話を聞く機会もつくりたい。そんなことのついでには同じ地域の産業や公共施設の見学なども併せ持ちたい。

一昨年来、行事が重っていつも困っていた第三日曜は思いきって佐伯市民歩こう会にゆずって、今年は「佐伯史談」の発行日取りと考え合せて、第四日曜を予定したい。歩こう会の動きの中に参加することも意味があり、それだけ私共も郷土を学ぶ機会が多くなるわけである。

このように考えてくると、せねばならぬことが多く大変なことになりそうである。物ずきな酔人（よっぱらい）が、趣味でやっていた、そんな時代から脱皮して、目まぐるしく変転している世相の中に、過去の歴史をちゃんとふまえ、現在を正しく把握し、今年も積極的に勉強していく意欲を燃やしたい。

そのためには、会の組織の改善、運営の方法に工夫がいるであろう。到底この私一人では出来ないことで、皆さんの協力というか、いや進んで企画なり運営なりに挺身して、指導してくれる人がほしい。会員の皆さんが、それぞれふさわしい部面を担当し、積極的に会の研修活動を推進してほしいものである。

県下には、私共の史談会と同様、あるいは似たような動きをしている団体はいくつかあろう。また佐伯地方にも、各種文化団体があり、それぞれ組織によっていろいろとやっている。その中に位して、私共は聴することなくやろうじゃないか。

私共には、過ぐる十数年の積重ねがある。何十人もの同志がある。何百人もの協力者後援者がある。態勢は出来ている。この私共の態勢で出来ないはずはない。

既に佐伯史談会は、その実績を地域社会からも認められている。これは私の思いあがりかも知れない。佐伯史談会はさらに今年はいろいろな夢を持っている。やれば必ず出来る。出来る力を持っていると確信する。これは私の妄想であろうか。

ともかくも佐伯史談会は、ユニークで実行力をもつ研究団体として、確信をもって新しい年度のスタートをきっている。大げさに言えば、百人なが驚倒するような一年になるのではあるまいか。

このような課題を、私は佐伯史談会にかけて、皆さんの賛同と協力を期待しているものである。

（おわり）

随想

今年の課題

会員　市野瀬　仁

（豊南高校勤務）

昨年の十二月十六日、佐伯史談会は定例の年末反省集会を、市内の某所で開いた。

今年一年間の反省と、来年の行事計画のアウトラインを羽柴幹事が述べた後、十余名の人達から、自由でなご